

2 奥州街道の賑わい

活気あふれる江戸口の姿

城下町入口の賑わい

柳町・荒町は江戸時代から信夫橋と深く関わって賑わってきました。延宝八年(1680年)には、信夫橋付近の城下町入口で、農民が持ち込む品々を町人が勝手に買ってはいけない、と禁じています。つまりわざわざ禁じるほど、農民と町民が自由な取引をしていたということ。明治35年の福島民報には、信夫橋を渡る一日の人数はざっと1500人。その8、9割の購買力は柳町と荒町に吸収されたとあります。「何れも油気のある商店が揃って居る」、つまり櫛の歯のように隙間なくずらりと並んでいると評されたように、活気に充ち溢れた町だったんですね。

①中村呉服店(中合の前身)



福島駅前老舗百貨店「中合」。実は大正初期まで荒町にありました。創業は天保元年(1830年)、行商から起こした中村呉服店が始まりで、その後、中村合名会社を設立。おなじみの中合は「中村合名」の略だったのです。当時としては、実におもいきった「正札付現金販売」で人気を博しました。



★当時の中村呉服店と引札

②宅宝院の石碑 ~ 甚兵衛火事

福島には今も語り継がれる大火事が、明治14年にありました。その名も甚兵衛火事。当時、福島は藁びきの屋根が多かったので燃えやすく、町の80%が火災で焼失しました。宅宝院には、火事の凄まじさを物語る石碑があります。火に焼かれ変色し、ふたつに割れたものが修復してあります。



宅宝院の石碑

③柳稲荷神社

江戸初期、荒川が大洪水となった時、上流より一個の箱が柳の老木の根元に流れ着きました。箱は稲荷大明神の祠。人々は、水から救ったのはこの稲荷大明神と信じ、町の守護神として祀るようになりました。神殿は甚兵衛火事で焼失しましたが、昭和8年に再建されました。



柳稲荷神社



★福島城下江戸口の図

⑦福島河岸

川の流れを利用した舟運で、荷物の積み下ろしをする場所を「河岸」と呼びます。ここは阿武隈川舟運の出発点、福島河岸。福島でとれたお米は河岸から舟に積み込まれ、河口に運ばれ、何度かの積み替えを経たのち、遠く江戸へと運ばれていきました。



再現された福島河岸

⑧御倉邸・おぐら茶屋

福島に日銀出張所ができたのは、明治32年、東北では初めてのこと。その日銀福島支店の支店長役宅として昭和2年に建築されました。木造平屋建て、寄棟、瓦葺きの建物で、和洋折衷の間もある戦前のお屋敷らしい佇まいです。今では福島市が買い取り管理しています。阿武隈川を見下ろす庭園の一面には休憩のできる茶屋や旧米沢藩米蔵(復元)もあります。



御倉邸



おぐら茶屋

開園 10時~18時
⑥火曜日・年末年始
入場無料

④信夫橋

この信夫橋は洪水のたびに流れ、4回架け替えられています。最初は2枚の大きな板を渡しただけのガントラ橋からはじまり、明治には木の橋、そして石橋に。その後、トラス橋となり、昭和7年に架けられたのが、今の信夫橋です。「暴れ川」とも呼ばれた荒川に橋を架け続けた福島人の根気強さを物語っています。



★2代目信夫橋



★3代目信夫橋

